

# ガウディ研究

## マラガのサグラダ・ファミリア聖堂賛歌

鳥居徳敏

### はじめに

アントニ・ガウディ（1852－1926）にとってサグラダ・ファミリア聖堂（1882年着工）の存在は極めて大きい。また、ガウディ建築はそのパトロンとなったアウゼビ・グエイ（1846－1918）の存在なくしては語れない。両者ともガウディをガウディたらしめ、歴史にガウディの名を刻むのに不可欠な2条件と想定できるものである。前者については拙論「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂の財政、および財政問題が同聖堂とガウディに与えた影響についての考察」<sup>1</sup>で、後者については拙稿「カタルーニャ・ムダルニスマ、その建築家たちとパトロンの系譜（ガウディとグエイを中心に）」<sup>2</sup>と



図1 ジュアン・マラガイ 1860-1911

「世紀末バルセロナにおける芸術家と資本家—ガウディとグエイ家を中心に」<sup>3</sup>で詳しく論じた。

1 『建築史学』（建築史学会）、第20号、1993年3月、54－89頁（鳥居－1993）

2 山道佳子、八嶋由香利、鳥居徳敏、木下亮：『近代都市バルセロナの形成—都市空間・芸術家・パトロン』慶應義塾大学出版会、2009、第4章（159－210頁）

3 浅井和春、他：『イメージとパトロン—美術史を学ぶための23章—』ブリュッケ、2009、343－60頁

本稿では、サグラダ・ファミリア聖堂をサグラダ・ファミリア聖堂たらしめ、今日に至るまで建設を可能にした必要条件のひとつに、ジュアン・マラガイの存在のあったことを前提とし、その果たした役割を具体的に検証する。また、マラガイの手段となった有名なエッセイのすべてを全訳することも本稿の目的とし、これによりガウディ研究に不可欠な基礎資料の一つを提供することにもなる。

## ジュアン・マラガイ

ジュアン・マラガイ・イ・グリーナ Joan Maragall i Gorina (1860 – 1911) は詩人として知られる。8歳年上のガウディが地方都市レウスの職人家庭の出身であるのに対し、主都バルセロナで繊維会社を営む家柄に生まれる。ただし、4人兄弟の唯一の男子ということもあり、父親は高校卒業と同時に家業に就くことを望んでいるから、裕福な大ブルジョアの出身ではない。しかし、大学に進学させる余裕があった。また、このことは文学好きの青年でありながら、哲・文学部ではなく、より実践的な法学部で学び、弁護士の道を選んでいることにも反映していよう。当時のスペインには10の大学が存在した。すべて国立である。マラガイが進学する1879年のバルセロナの人口が約36万人、これに対し同大学哲・文学部の学生総数は60人で、法学部は483人であった<sup>4</sup>。この数字からは、後者の選択はごく自然の成り行きであったとも考えられる。いずれにしても、1884年に卒業して以来は弁護士業を生業とすることになるが、転機が訪れるのは6年後の1890年、この年から新聞『日刊バルセロナ』に参画することになったのだ。以降、ジャーナリスト業の比重が弁護士業を圧倒するようになり、その他の新聞『ラ・ラナシェンサ（復興）La Renaixença』や『カタルーニャの声 La veu de Catalunya』、雑誌『進歩 L'Avenc』や『カタロニア Catalonia』や『光 Luz』などにも記事を掲載するようになる。ジャーナリストといっても、一般の報道記事ではなく、いわゆる論説記事を担当し、後で具体的に見ることができるように、民意形成に重要な役割を演じるエッセイストであった。

好きな詩に関しては、既に大学に進学する以前に出版の経験を持ち、詩作を生涯の友とした。詩人としての地位を揺るぎないものとしたのは、中世に起源を持

---

4 "Almanaque del Diario de Barcelona" para el año 1881, p.129

ち、19世紀半ばに復活したもっとも権威あるカタルーニャ語の詩のコンテスト、バルセロナの『花の祭典 Jocs Florals de Barcelona』3賞すべてを受賞することになった。1894年、『サルダーナ』でジャスミン賞（祖国、歴史、または市民テーマの最優秀詩）、1896年、『悪しき獵師』でスマレ賞（宗教、精神、または道徳テーマでの最優秀詩）、そして、1904年『注解』で自然花賞（自由テーマでの最優秀詩）を獲得し、これら3賞すべてを受賞することにより「詩匠」の称号が与えられた。また、1910年には、国王アルフォンソ13世により前年に創設された文学賞「ファステンラス Fastenrath 賞」を詩『彼方に』で受賞する。こうした実績から「カタルーニャの大詩人」とも言われるようになる。エッセイストとして、また著名な詩人として、その影響力は絶大となり、それ故、当時のカタルーニャ政界実力者（「リーガ《地方主義連盟》」党首）プラット・ダ・ラ・リーバ（1870 - 1917）やカンボー（1876 - 1947）などから国会議員に推されたりもしたが、それを承諾することはなかった。

さらに、マラガイには翻訳者の側面もあった。ドイツ語、英語、フランス語、そしてギリシア語からの翻訳で、特にドイツ語からの翻訳が多数を占め、ベートーヴェンの『欧州讃歌、交響曲第9番ニ短調作品125』、ゲーテの『タウリス島のイフィゲーニエ』、『ローマ悲歌』、『ファウスト』の部分訳など、ノヴァーリスの『ハインリヒ・フォン・オフタアディンゲン』（『青い花』）と断片集（『花粉』）、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』などを訳す。また、英語からはラスキンの講演『労働』、ギリシア語からはホメロスの頌詩やピンダロスの『オリュンピア第1頌歌』を訳出する<sup>5</sup>。このラスキンの翻訳を手掛けていることから、これから見るガウディとの友好関係を根拠に、マラガイを通してラスキンのガウディへの影響を示唆する見解も見られるが、可能性は否定できないものの、肯定する根拠には乏しいと言わざるを得ない。なぜなら、ラスキンに関しては前記講演録のみの翻訳であり、ゲーテに見られた熱心さが見られないからである。

---

5 マラガイに関するデータは以下のウェブ・サイトを参照する。Trigo, Xulio Ricardo; Vendrell, Òscar; Ros, Carme, y Marçal, Heura: *Joan Maragall* (HP: Associació d' Escriptors en Llengua Catalana, "Autors i autors") <http://www.escriptors.cat/autors/maragallj/index.php> (2011年8月24日アクセス)

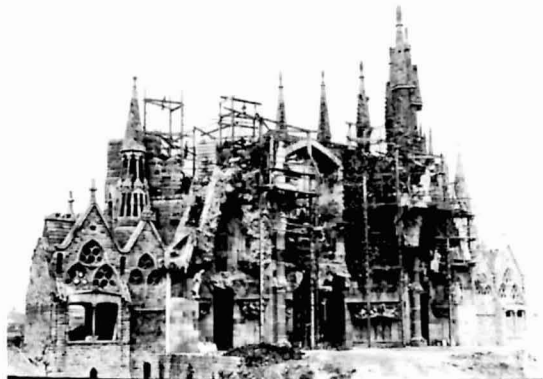
## ガウディとの関係

ガウディとの関係は決して古くはない。マラガのサグラダ・ファミリア聖堂に関する最初の論稿は1900年12月19日の『日刊バルセロナ』に掲載された「生まれつつある聖堂」であり、それ以前の両者の接触に関しては、唯一、二人とも1899年創設された「モンセラート聖母信心会（精神的連盟）Lliga Espiritual de la Mare de Déu de Montserrat」の創設メンバーであったことから、その可能性が推測されるのみである。ただし、後者の接触があり、前者の論稿が生まれた可能性は十分であろう。他方、両者の友好関係は現存するガウディ書簡により証明され、短文のそれらの手紙は1906年から1909年までの6通存在する<sup>6</sup>。その最初の書簡の日付は1906年11月16日であり、マラガの聖堂に関わる5論稿のうち、4つ目の論稿を発表した後のことである。したがって、両者の関係はマラガの論稿が先にあり、その結果友好が深まったと見るべきであろう。

## マラガの聖堂讃歌

### 1. 「生まれつつある聖堂」（1900年12月19日）

マラガのこの論稿「生まれつつある聖堂」は新聞に掲載されたものだが、単なる報道記事ではない。さりとして、論説記事でもなく、エッセイ（随筆）とも言い難い。敢えて言えば、散文詩であり、讃歌と言うべきものであろう。マラガの文筆活動はロマン主義の流れを汲む「生きた言葉」を信条とし、それは感情の表現を重視し、自らほとぼしり出る自然さや率直さを旨とする。本稿もこの理論を体現しており、生まれつつある聖堂を見事に謳い上げている。



本来なら、論者のような

図2 降誕の正面（翼廊のファサード）1899年建設状況

6 Mercader, Laura: *Gaudí, escritos y documentos*, Barcelona; Quaderns Crema, 2002, pp.265-70. 鳥居徳敏（編・訳・注解）：『建築家ガウディ全語録』中央公論美術出版、2007、310-13頁

文学的センスのない人間が訳すべきものではない。しかし、現段階では誰もこの労を取るものが見当たらないから、仕方なく翻訳する。というのも、サグラダ・ファミリア聖堂の評価を決定付ける最初にして、もっとも重要な史料のひとつであり、これにより聖堂の異様さが顕現される

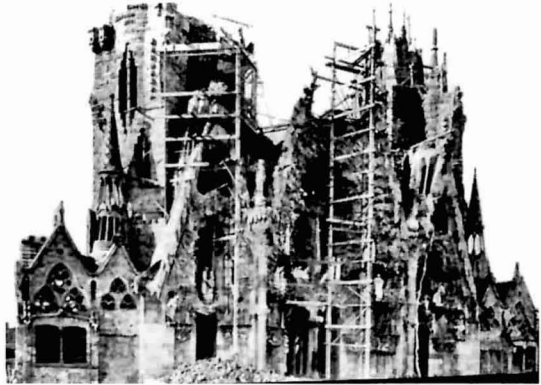


図3 降誕のファサード1900年建設状況

一方、ガウディの足元も固められ、次ステージへのステップが用意されたと想定できるからである。

この1900年という段階は、図版(図3)に見られるように「降誕」のファサードの全貌が形を取り始めたばかりのころである。その前年の1899年の建設状況(図2)では未だ謳うことは不可能であろう。してみると、速報性を重視する新聞記事にふさわしく、マラガイというジャーナリストがその社会的責任を果たすべく書かれた報道記事とも考えられる。確かに、この讃歌は、既に述べたこの時点での希薄な友好関係から見て、聖堂とかガウディとかの宣伝を目的したものとは考え難い。また、パトロンのグエイとか、あるいは教会関係者とかからの要請があったとの情報も全く聞こえてこない。初めて見る「降誕」のファサードに感動し、その感動が自発的、かつ率直に文字に置き換えられたものがこの「生まれつつある聖堂」であろう。

### 生まれつつある聖堂 El templo que nace

バルセロナ北の郊外、喧騒な工場地帯とも言えず、さりどて豪壮な貴族的高级住宅街でもない、性格の曖昧な地域がある。それらの一つであるサン・マルティン・デ・プロベンサルスの山の手に行く人は、曖昧な性格の故に田園ならではの魅惑を備えたその郊外のまん中に、オアシスに咲く石の花の如く聖堂が建ち上がりつつあるのを見るであろう。

樹木がゆったりとした威厳さを持って成長するかのように、それはひとりでの建ち上がって行くかのように見える。未だ混沌とした大きな塊の中から、天高く聳えることを既に窺わせる尖塔。それらの間に住まい、そして囁きながら飛び交う鳥たちは、間違いなくそれを大木と思っていることであろう。この大木は既に何世代もの鳥たちを見守って来たり、将来の完成した樹冠の下に入ることでできる最初の世代が到来するまでには、これからも何世代の人々が過ぎ去るのを見ることになる。

そこに近づく人は、何世紀も前から存在する巨大な廃墟の一部だと思い驚くことであろう。だが、あの明らかに廃墟と思えるものが実はそうではなく、生まれつつあるものの壮大さだと知るなら、久遠なるものの喜びでその胸は満たされよう。

聖堂は、高さや規模がどのようになるのかを秘したまま、時とともにより高く、より大きくなって行こう。絶対的な自然力のように、個々人の役割、労苦、障害、夢、成果などを呑み込み、高きものへの衝動という単純な巨大さに融合されたすべてを内に包み込みながら成長する。

これが生まれる前、誰がこうなろうと夢に描いたのであろうか。着工の財源を、誰が調達したのであろうか。この大きな石の塊を、誰が構想したのであろうか。誰が、建立しているのか。いかなる命が、この創造に費やされているのであろうか。これらすべての疑問にたった一つの言葉が答える。それは信仰だと。高きものへの信仰、その熱情のなかであらゆる努力が費やされ、その輝きにすべての人の名が消え失せる。しかし、誰ひとりとしてその名を失うことはない。天上の王国で名をもたぬ献身的な信仰が、大都会のまん中のオアシスに将来の人々のために聖堂を建立しているのだ。

生まれつつある聖堂は既にひとつの扉口〔玄関〕を持つ。その扉口は労働者街区の方を向く。未だ屋根はない、しかし、既に扉口がある。未だ庇護することはできないが、既に庇護しようとしている。境内は未だ閉ざされていない。にもかかわらず、そのなかに既に入れる。生まれつつあるのに、既に人を招く。未来の礼拝で未来の身廊を埋め尽くすことになる将来の来訪者とともに、今生きている人々を聖体拝領に招いている。

身廊はどのようになるだろう。礼拝はどのようであろうか。巨大な共鳴箱での聖歌はどんな響きになろう。誰にもわからない。しかし、既に聖堂は至高の信仰のな

かで確実に聖体拝領に招いている。

この扉口は何かしら素晴らしい。建築ではない、建築の詩なのだ。人間による建築物には見えない。大地や岩山がその不活性から活性を得ようとしているようで、無言の石の塊に、天と地にある像、姿、象徴の意味を表し、それらを描き出しているように思える。

それは、「降誕祭」という歓喜を言いよどむ石の塊である。ここでは、大地の最下級の生き物が天の御使や、樹木の枝葉や、深遠な洞窟の鍾乳石や、もっとも高貴な信念を表す神秘的な象徴とともに、それらが眠っていた不定形の石塊に打ち勝ち、そこから生まれようとしている。事実打ち勝ち、何かしら永遠のような「降誕祭」を更新の弛みない営みのように創造を謳い上げながら、形成され、出現している。すべてを支え、大地と区別できないほど重厚な亀から、上方の神秘的な勝利の栄光〔椰子の葉〕に至るまで、そこにあるすべてが、イエス、生まれたばかりの赤子を、いつも生まれつつある永遠の赤子を見つめているように思える。そのように、労働者街区を向く「降誕」の扉口が建設されている。その上、さらに上方には、未だ何も形成されておらず、空、野、日、風、および鳥たちが、彼



図4 降誕の正面（翼廊のファサード）1893 - 1935、ただし、すべての彫像設置は2000年

らの歌声の喜びとともに、聖堂のゆっくりとした形成を祝福している。

終りなき形成の何という喜びであろうか。この聖堂の建設に一生の生命以上のものを捧げている男が、慎み深くも、その完成を見ようともせず、後世の人々に建設の継続と完成を託していることを私は知っている。この慎み深さと自己犠牲のしたに、神秘主義者の夢と詩人のとぎすまされた楽しみとが脈動しているのだ。なぜなら、一人の生命よりも長い歳月を要する作品に、また、将来の幾世代もの人々がつぎこまなければならない作品に、その人の全生涯を捧げること以上に、さらに意味深く、より美しい目的があるとでもいうのであろうか。こうした仕事が一人の男にどれほどの安心をもたらすことであろうか、時と死に対する何というさげすみであろうか、永遠に生きることの何という保証であろうか。

完成することなく、永遠に建設中の聖堂、蒼穹に屋根を架けることも、風に対し外壁を建てることも、人々の通行に対し扉を閉ざすことも、また、街頭のざわめきや鳥たちのさえずりを響き渡らせることもない聖堂。常に祭壇を待ち、常にそこへの神の降臨を熱望しながら、その無限の高さに決して到達することはないが、しかし、一時たりともその麗しい期待を忘れることなく、常に神の方へ建ち上がりつつある聖堂。世代から世代へと幾世紀も受け継ぐための何と美しきシンボルであろうか。

「降誕祭」〔12月25日〕をこの聖堂の名前にすべきだし、その祭日にすべきであろう。なぜなら、まだ定まらぬその建築は誠に永久の「誕生〔降誕〕」であるからだ。

私たち地元の人々はそれをサグラダ・ファミリア聖堂として知っており、その素晴らしい扉口〔降誕の正面〕はカタルーニャ語の神秘的な快い響き「ナダール〔降誕祭〕」の名にふさわしく思える。

(傍点は訳者による強調)

ジュアン・マラガイ

『日刊バルセロナ』(バルセロナ、1900年12月19日)<sup>7</sup>

No.553, pp.10593-54

マラガイのこの聖堂第1讃歌は、サグラダ・ファミリア聖堂の存在をバルセロ

7 Maragall, Joan: "El templo que nace", *Diario de Barcelona* (Barcelona, 20 diciembre 1900), N°553, pp.10593-94. [ ] 内は訳者の補足説明。ただし ( ) 内は原文の補足説明を意味する。



ナの一般市民に認識させる意義を担い、その普通ではない神秘さを顕現させ、この聖堂の絶賛的評価の端緒になった。

聖堂が着工された1882年からこの讃歌が発表される1900年まで、サグラダ・ファミリアの報道がなかったわけでない。建立母体の「サン・ホセ帰依者信心会（精神的協会）」機関誌では、当然のことながら、聖堂建設に関わる報道がなされてきた。一般の新聞紙上でも、起工式の報道記事がバルセロナのみならず、マドリードでも掲載された。また、1885年3月のクリプタ（地下礼拝堂）の7つの放射状祭室中央の「サン・ホセ祭室」が完成した折も、バルセロナの新聞はそのことを報じた。しかし、いずれもニュースとしての記事に過ぎない。ただし、例外がないわけではない。例えば、1885年のミケルの評論記事<sup>8</sup>とか、1895年のトラス・イ・バジャス著の祈祷書<sup>9</sup>に挿入された短文の聖堂評価などだ。だが、これらは将来を見込んでの評価であって、目の前に具現された作品の評価ではない。同じ1900年になっても、若い建築家で建築雑誌の編集長でもあったベガ・イ・マルクは、聖堂は「未だ建設中であり、またそれは相当の年月続くことであろうから、聖堂を評価するのは難しい。しかし、少なくとも、創造力と構造の大胆さの範例として提示されるべきであろう」と述べ、評価を留保しているのだ<sup>10</sup>。こうした状況に決定的なくさびを打ち込んだのが、このマラガイの「生まれつつある聖堂」であったのである。これ以降、大聖堂と並び称されるバルセロナのシンボルと言われ始める。その例としてバルセロナの「カタルーニャ探訪センター」の集団訪問を挙げることができる。この知識人たちの組織は地域の歴史的モニュメントを調査研究することでカタルーニャの歴史性を深め、地域のアイデンティティーを高める目的を持っていた。しかし、1901年2月24日の50 - 60人よりなるサグラダ・ファミリアへの集団見学は、過去の歴史的モニュメントではなく、現代建築の、しかも建設中の聖堂への訪問であった。ここで、ガウディは4

---

8 Miquel y Badia, F.: "Nuevos monumentos", *Diario de Barcelona* (Barcelona, 13 mayo 1885), N°133, pp.5791-93

9 Torras y Bages, José: *Mes en honor del Patriarca Sant Josep. Patró de la Iglesia*, Barcelona; Subirana, 1895

10 Vega y March, Manuel: "La arquitectura en España durante el siglo XIX - Provincia de Barcelona", *Resumen de Arquitectura* (Madrid, 1 septiembre 1900), Año XXVI, N°9, p.124

時間にわたる聖堂解説をしているのだ<sup>11</sup>。これは建設中のサグラダ・ファミリアがカタルーニャを象徴する歴史モニュメントに匹敵することを明示するイベントになろう。

また、この聖堂讃歌はガウディの精神構造にも決定的なくさびを打ち込んでいる。それは訳者が傍点で強調した部分、つまり「完成することが絶望的な未完の作品に全生涯を捧げる以上に意味深く、美しい目的がこの世にあるのか」という真理を説く部分である。おそらく、将来のガウディと聖堂との関係を決定付ける重要な言説のひとつと想定すべきものであろう。

## 2. 『『サグラダ・ファミリア』にて』（1905年1月15日）

この第2聖堂讃歌はカタルーニャ語の週刊誌『カタルーニャ画報』に同言語で掲載された。同じ意味のスペイン語タイトルの讃歌が翌1906年に『日刊バルセロナ』に発表されるが、同じ内容ではない。この第2讃歌がいかなる理由で書かれたかは定かでない。第4聖堂讃歌などを読んでいると、マラガイは時たま聖堂を訪れたのではなく、ある程度の頻度で訪問していることを窺わせる。また、訪問するたびにガウディとの会話を楽しんでいるようにも推測される。次の第3讃歌は正にガウディの訴えに応じて発表したものであろう。だとすれば、マラガイは聖堂の財政が極めて厳しい状況にあることを知っていたはずである。このことは第1讃歌でも明白に読み取れる。なぜなら、サグラダ・ファミリアの完成はガウディー世代では不可能で、何世



図5 ガウディ（左）とマラガイ（中）

代も要する聖堂であるとし、この未完性を前提にしているからだ。1898年には財政が聖堂の完成を諦めさせる状況にあり、1905年の建設状況は降誕のファサードの建設を中断し、鐘塔の建設のみに工事をシフトした段階にあった。すなわち、

11 Conyll, Bonaventura: "El temple de la Sagrada Familia", *Butlletí del Centre Excursionista de Catalunya* (Barcelona, abril de 1901), Any 11, N°75, pp.105-09 / *El Propagador de la Devoción a San José* (Barcelona, 15 marzo 1902), Año 36, N°6, pp.82-84

工事量が少なくても、見た目には建設がはかどっているように見せるため、資金不足で完全な建設中断に陥らないようしていたのである<sup>12</sup>。

## 『サグラダ・ファミリア』にて A la «Sagrada Familia»

あのサグラダ・ファミリアでは、素晴らしいことが起きている。既に奇跡的でもあるあれらの石に囲まれて新しい世界が生まれている。それは安らぎの世界でもある。

未だ聖堂ではないものの、その大変大きな聖堂の、未だ境内ではないが、境内以上のその聖域に入るなら、この上ない慎み深さと、これに伴う安らぎと喜びとを感じることであろう。尖塔に巣をかける鳥たちの囁りとともに、苛立つことも興奮することもなく、信心深いほど慎ましいツチとノミの音色がどこからともなく風に運ばれて来るなか、日に当る老人たちや、切石置場で戯れる子供たちを見るだろう。それら切石はいずれあの不思議〔驚異〕な建築の高みに積まれることになる。陽光はすべてを照らし、青い空は美しく建設されている未完の壁体に穿たれた大窓の透かし彫りの地であり、巨大なヴォールト〔天井〕である・・・それは市のすべてを抱擁するべくして開かれた大聖堂であり、それら壁の開かれた腕〔翼廊〕に近づく人は抱擁の温かさを感じることであろう。

あれらの壁は、際限のない愛情を抱き、腕を閉じるどころか、どこまでも開こうとしているようで、東や西へ、市や村へ、海や山へと広がって行くようだ。開くに従い、包まれるものすべては、今既にそのなかに抱かれ、日に当たっている老人たちや遊んでいる子供たち、また空に鳥たちが飛び交うなか、ツチやノミを優しく奏でる職人たちのように、愛情深く善良になることであろう。

なぜ、諸君らの・・・だれ一人、そこに行こうとしないのか。行ってみなさい、何度も行くことを勧める。そこでは素晴らしいことを語ってくれる金髪の顎鬚をたくわえた男に出会うことだろう。新しいことではないが、知っていたことを知らないでいた素晴らしいことを話してくれる。なぜなら、日の当たるところに新しいことは何も無いものの、よく見れば、すべては常に新しく、観察力鋭く謙虚な目にはすべてが語り尽くされることがないからだ。謙虚さをもって熱心に観察してきた人の言葉には、ものごとの本質を匂わせる何かがある。

<sup>12</sup> 財政問題については注1の拙論（鳥居－1993）に詳しい。

彼はそこで弟子たちと仕事をし（モルタルをこねる最後の職人が彼の一番弟子であろうことを誰が知ろう）、その仕事は太陽に向かってゆっくりと建ち上がって行くあの大きな壁なのだ。その壁は、青空を窓の透かし彫りで縁取り、壁の表面を包む霧を晴らすかのように、植物や花や果実や動物の浮彫や彫像、および石の深い眠りから覚め、意味ある御言葉の力により既に神を模した被造物を予想させる人像を取付けながら、そうしたヴィジョンで活気を帯びている。

そして、幾世紀も中断することなく建設される大きな翼のように、空間に建ち広がって行くあの壁は、そこで働く男たち、最後の職人としての建築家の作品である。その壁はおそらく彼の作品、すなわち、彼が見た、精神の夢の深みから見た愛の作品、諸手を広げ激しい口調で近づき、決して満足することのない愛の作品の象徴に過ぎないのだ・・・。

金髪髭の建築家の瞳の奥に大きな炎の光が輝いているのを私は見たことがある。彼の慎ましい言葉は一気にほとぼしり、弟子たちの物静かに考え込む顔には遠方からの同じ強い光が輝き、最後の職人の穏やかな仕草は、誰よりも彼自身が建築家の兄弟だと感じているように思わせる。切石の間で日に当たる老人たち、無心に遊ぶ子供たち、それらの間を瞑想して通る善良な人々、そしてその周辺を偶然にも歩くことになる人々の満足した高方への視線に、われわれの<sup>まち</sup>市で何か大きなことがなされていること、および<sup>まち</sup>市の人々はそのことを何ら考えていないことを、私は感じるのだ。

諸君らすべてはそこに行き、何が起っているのかを見るべきである。だが、行くべきでない。もし純粋な気持ちでないのなら、邪魔にならないよう行く必要はない。流行とか道楽とかの気持ちでそこに行くのなら、行くべきではないし、そう諸君にお願いする。何ら助けになることはなく、大変まずい結果になりかねないかも知れないからだ。心から最後の職人の兄弟と自らを感じ、モルタルを捏ねる手助けをしたいと思う人のみが行くべきである。

ジュアン・マラガイ

『カタルーニャ画報』（バルセロナ、1905年1月15日）<sup>13</sup>

Any II, No85, pp.35-37

13 Maragall, Joan: "A la «Sagrada Família»", *Il·lustració Catalana* (Barcelona, 15 enero 1905), Any II, Nº85, pp.35 y 37

### 3. 「御慈悲のお恵みを・・・！」(1905年11月7日)

この第3聖堂讃歌は将来のサグラダ・ファミリア聖堂の建立理念を決定付けた意味でもっとも重要な賛歌であった。この聖堂はバルセロナやカタルーニャのために建立することを本来の目的とはしていない。1898年までスペインの植民地であったフィリピンを含む中南米諸国などのスペイン語圏の聖ヨセフに帰依する信者たちの聖堂を建立することが目的あり、その帰依者たちが組織する信心会の本堂としての建設であった。したがって、バルセロナの一般市民とは無関係な建立である。しかし、この聖堂に魅了されたマラガイは、資金不足で建設を中断しなければならないことを知り、その続行をバルセロナの一般市民に訴える必要があった。

そこで最初の必要条件が聖堂の理念転換にあった。「サン・ホセ信心会」の本堂であることには触れず、「サグラダ・ファミリア聖堂は、バルセロナにおけるカタルーニャの理想の記念碑」であると建立目的の転換を計る。そしてガウディを、そのモニュメントを実現する「神の使者」であり、この使者は「カタルーニャの天才」だと定義付ける。この二つを論拠として、バルセロナの一般市民に聖堂への献金を要請したのである。同じような例をアテネ市民にとってのパルテノンに見つけ、バルセロナ市民にとってサグラダ・ファミリアは不可欠な存在であることを訴え、ガウディはサグラダ・ファミリアを作りながら、同時に「われわれカタルーニャ人たち」をも実現しているという真理を解き明かす。

### 御慈悲のお恵みを・・・！ ¡Una gracia de caridad...!

古代のローマ市民がそうであったであろうように、私はしばしばバルセロナ市民であることに高い誇りを持つことがある。しかし、時にはそうであることを恥じることもある。今、私はそうした恥を感じているのだ。

サグラダ・ファミリア聖堂を作っているあの男が私にこう言う。建設を続ける資金が底を突きつつあり、布施が減っている、と。すなわち、私たちの間で理想が縮小している、と。私はいつもこの手の些細な理想を疑ってきた。それは私たち最大の生来の欠点であり、本質的な欠点なのだ。その理想がさらに小さくなっていると言うのなら、私は冷静さを失わざるを得ない。なぜなら、資金不足でサグラダ・ファミリアの建設が中断する日が来るなら、それはバルセロナにとって、

またカタルーニャにとっても、公道で爆弾が炸裂したり、あるいは百の工場が閉鎖されたりする時と同じく、もっとも不吉な日になろうからだ。なぜなら、血に染まった無政府状態の国民であっても、また窮乏状態の国民であっても、未だ国民と呼べるし、あらゆる希望を持つ権利があるものの、理想のない国民はゼロに等しく、何の権利も持ち得ないからである。

サグラダ・ファミリア聖堂は、バルセロナにおけるカタルーニャの理想の記念碑〔モニュメント〕であり、どこまでも上昇しようとする信仰の象徴であり、高きもの〔神〕への切望を石化したもの、そして、〔カタルーニャの〕国民の魂を映し出す像〔イメージ〕である。その周りのあちこちに建っているような小さな聖堂や礼拝堂、また小宮殿や修道院は、小さな理想であり、敬うべき小さな慈愛である。またそれらは大きな理想や慈愛の障害にならない程度なら、賞賛されましよう。われわれは、理想や富を多くの小さなものを作るのに浪費する国民なのであろうか。われわれに大きなものを作る能力がないとすれば、その他すべてはいつの日か崩れ去るというのに。なぜなら、われわれの能力の大きさは作る大きさにかかっているからだ。その大きな理想が、立ち往生し、「もうできない」と泣きながら言うような日が来てしまったのだ。

あの作品には天命的な兆のあることを見なければならぬ。カタルーニャ人の感情がその理想の拡大を始め、またバルセロナ市がその物理的拡張を始めたとき、旧市街のとある店の薄暗い奥から、大きな理想を抱いた小さな男が現れた。彼の理想は、新しい大聖堂の建立だった。そして彼は、些細で手間のかかる仕事に取り掛かり、極小の布施で輝かしい工事に着手した。市からは遠方の郊外、未だ野原の地、その大地に基礎を築いた。市は未だ遠くにあり、何も知らないでいた。時は流れ、小さな布施は増え、礎石は将来の輝かしい巨躯を支えるため地下で締固められた。未だ何も見えず、市は誇らしげにそちら側に進んできた。しかし、何も知らないでいた（そしてそこでは、自らの栄光が築かれていた）。が、芽吹いた種子が大地を起し、苗が光を求めて地表に現れたその時、神の使者として、もうひとりの男、あのヴィジョンを抱いた夢想家が出現した。

夢想家であるだけに、誰も彼のことを気にせず、彼もまた、誰のことも気にかけるなかった。しかし、彼は自力で自らのヴィジョンを描き始め、聖堂は幾世紀かに一度の大開花のごとく建ち始めた。ある日のこと、そちらに進んできた市はそ

の素晴らしい出現に気づき、度肝を抜かれた。その後、聖堂は望んで市まちに近づいて行き、近づけば近づくほど、聖堂は建ち上がって行く。そして、聖堂に隠れた夢想家は、自らの理想を石に織り上げて行き、聖堂はそれらの石を生み出した命、すなわちカタルーニャの命の鼓動とともに建立される。なぜなら、あの男はカタルーニャの天才であるからだ。そして市まちは喜び、勝利の天に花と穂の束を聳え立たせる尖塔群の足元に建物の波を打ち寄せて行く。市まちも成長し、聖堂も成長する。共に定まることなしに。なぜなら、魂は未だ内奥深くにいるからだ。市まちは外からの訪問者すべてに建設中の聖堂を誇らしげに示し、聖堂は物理的に拡大しつつある市まちに品格を与える。近い将来、バルセロナはあの聖堂まちの市まちになるであろうし、聖堂はあの市まちの聖堂まちでしかあり得なくなるであろう。両者は永遠に切っても切れない関係になろう。

その聖堂の建設が中断するという。君らの体に予期せぬ不安のよぎるのを感じないだろうか。それとも、その連帯を知らないとも言うのであろうか。君らはその連帯を知らない。君らは未だサグラダ・ファミリア聖堂を知らないし、よく見たことがない。君らの連帯は未だ小さな聖堂や小さな宮殿、ありとあらゆる矮小な理想や小さな慈愛と共にある。魂は今なお内奥深くにいる。なぜなら、極めて小さなものに巨額の布施のあることを聞くが、しかし、このサグラダ・ファミリアという大きなものには小さな布施しか聞こえて来ないからだ。その小さな布施は貧乏人のオボロス〔少額の寄付金〕と呼ばれ、もっとも貴重であり、もっとも神にふさわしく、作品にはもっとも輝かしい布施なのだ。こうした人々の寄付による作品なのだ。しかし、君らもまた、そうした人々の一人ではないのか。村のみすぼらしい司祭、君らが裕福な聖人と呼ぶ信心深い人、息子の健康を願って2レアル〔少額の2銭にも相当〕の賽銭をする母親、隠れて布施をする日雇い、聖人に願い事をする乙女、そして、膨れた大きな手で賽銭箱に小銭だけを入れることのできる農夫、こうした人々だけが人々だとも言いたいのか。諸君らはそうした人々であることを望まないのか。悲しいかな、魂は今なお内奥深くにいるのだ。

いずれにしても、人々は献金に疲れ、もうできないことを君たちは知らなくてはならない。人々は自らの聖堂を作り、われわれに大きな聖堂を作ってきた。しかし、君らが聖堂にも人々にも何ら望むことのないことを知ると、人々は聖堂に

も君らにも疲れ始めた……。というのも、真実それ以上できないからだ。人々はもうできない。このことも君らを震撼させないのか、君たちの中には一片の市民感情も残っていないのか。仮に君たちに何もなかったら、そのことがな一層君らを震撼させないのか。

バルセロナの良識のある市民すべてが、財産に関する遺言書を作成する際、その一部をサンタ・クルス病院に譲渡すべきと思っていた時代があった。今問題にしている聖堂がそうであるように、この病院も個人の創立であったが、市民の一人ひとりは何か自分のもののように感じていた。なぜなら、自らの中に市全体を感じていたからだし、あの昔の市には自らの市民がいたからだ。しかし、この新しい市には新しく大きな市民と感じるような市民が未だ存在しないのだ。昔の市民は総合病院の敬うべき有用性を感じていたが、今の市民は聖堂の有用性を感じないのであろうか。そうなら、彼らに言いたい。聖堂は病院よりも有用だし、擁護院よりも、また修道院よりも有用だと。なぜなら、聖堂を建立する行為には、すべての病院、すべての擁護院、そしてすべての修道院を作るに等しい徳があるからだ。聖堂は最小限の食糧を満足させることと同じく極めて急を要することだ、と私は言いたい。古代のアテネでは多くの人が非常に貧しく生き、死んでいったことを考えてみよう。だとして、君らは痛みを感じるだろうか。しかし、パルテノンが建設されなかったとしたら、君らはどう感じるだろう。ギリシア人にとって何がもっとも必要であったのか。何が人間精神にもっとも必要であったのか。

今、そこに、建設半ばで、もう続行できないでいる、われわれのパルテノンがある。それと共に、われわれすべても中途半端な発育不全の状態になっていることを考えるべきだ。聖堂を作っている男〔ガウディ〕は、それを作りながら、同時にわれわれ〔カタルーニャ人〕自身をも作っていることを悟るべきだ。君らはこの神秘を読み取れないとでもいうのか。物事はあいまいに引き延ばすことはできず、時は流れ、天命を受けた彼もやがては死ぬ。だとしたら、どうなるかを考えるべきだ。彼は言う、大した問題ではない、聖堂は何世紀もかかるのだから、と。しかし、私は思う。その完成ヴィジョンをわれわれに示さぬ限り、彼には死ぬ権利はないと。そのヴィジョンは時代のヴィジョンであり、われわれがその時代であるからだ。ヴィジョンがあれば、後は、次世代が時代に合わせ完成させることであろう。もしわれわれのケチ根性がため、後世に未完のヴィジョンを遺したま



ま彼に死ぬ権利を与えたとしたら。もしわれわれが、未完の聖堂に終わった未完の市民であると、歴史にその名を刻まれたとしたら。未完の聖堂の市民、と人は言おう。これは「カタルーニヤ人たちのケチさゆえの貧困」なのだ。「詩人」〔ガウディ〕の汚名はカタルーニヤを前にして消え去ることはないであろう。

なぜガウディは、日中の街に出て、片手に帽子を差し伸べ、すべての人々に聖堂への布施を声高に請わないのか。できることなら、私はそれを見たい。これらの人々が、あまりにも慎重なわが市民が、崇高なこの狂気沙汰を前にして、ついには気が狂い、預言者の行く手に後光が差すかのような逆上情況のなかで、胸や腕から宝石をはぎとり、裏ポケットから紙幣を取り出し、貧しい人はその貧しさを、子供らは玩具を与えるであろう。この狂気沙汰が度をませばますほど、聖堂はさらに高く、さらに大きくひとりでに建ち上がって行くと思う。石が石を生み、円柱が枝のようにアーチに広がり、ヴォールトが緩やかに弧を描いて行こう。ヴィジョンは完成しよう。わが市民がそうであろうからだ。だとすれば、カタルーニヤは自らの新聖堂を建立した市民の威厳をもって歴史に名を遺すことになる。ヴィジョン、完成ヴィジョン、君にそれを信じたい。最後にこう言って君を奮い立たせたい。真昼の通りに出て、「神の愛による御慈愛のお恵みを！」と声高にガウディが叫ぶことを。

(傍点は訳者による強調)

ジュアン・マラガイ

『日刊バルセロナ』(バルセロナ、1905年11月7日)<sup>14</sup>

Nº295, pp.12127-28

この聖堂讃歌はバルセロナ市民のみならず、ガウディにも要請する内容を含んでいた。すなわち「完成ヴィジョンをわれわれに示さぬ限り、彼には死ぬ権利はない」として、ガウディに聖堂計画案の完成を要請していたのである。さらに、聖堂にじっとして献金の集まるのを待つのではなく、街頭に出て献金請いをするように、とガウディに要請しているのである。この要請を受け、翌年1月に現在知られている聖堂完成予想図(図6)が初めて公表された<sup>15</sup>。献金請いに関しては、

14 Maragall, Joan: "¡Una gracia de caridad...!", *Diario de Barcelona* (Barcelona, 7 noviembre 1905), Nº295, pp.12127-28

15 "El Temple de la Sagrada Família – El Somni Realisat", *La Veu de Catalunya* (Barcelona, 20 janer 1906), Any 16, Nº2437, p.3. 同年3月には助手ルビオーによって描かれた完成予想図(図8)も以下の雑誌に公表される "Lo Temple de la Sagrada Família – Idea de lo que será 'l Temple una cap acabat", *Il·lustració Catalana* (Barcelona, 18 mars 1906), Any 4, Nº146, p.161

マラガイ亡き後の1914年の冬、聖堂の赤字財政で建設中断の決定が下された時、その決定を覆すべく実行され、それは戸別訪問という形で実現された。事実、この戸別訪問により巨額の献金が生まれ、現在までの聖堂建設が可能になっているのだ。

#### 4. 「サグラダ・ファミリアにて」

(1906年3月19日)

この第4聖堂讃歌は第2賛歌と同じタイトルで新聞『日刊バルセロナ』にスペイン語で掲載された。第1賛歌「生

まれつつある聖堂」と第3賛歌「御慈悲のお恵みを・・・！」も同新聞での掲載であるから、これで3度目となる。また、この讃歌が掲載されたのは3月19日であり、この日は聖ヨセフ、すなわちサン・ホセの祭日に相当する。宗教心の薄らいだ時代である。この時代に唯一お布施だけによる聖堂の建立がいかに難しいかを物語っているような賛歌である。一般市民に献金の要請をしたいのだが、直球で攻める訳には行かない。変化球を交え、建設中の聖堂がいかに神秘的なものであるかを訴えることにより、聖堂への関心を促し、何とか献金に漕ぎついてもらいたいという願いで書かれたものが本讃歌であろう。

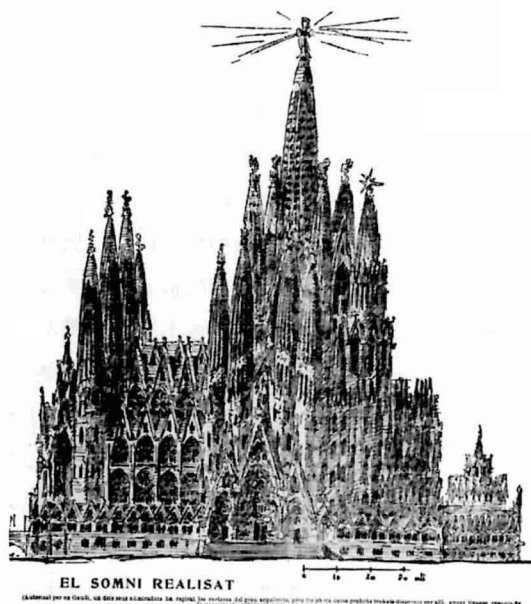


図6 聖堂完成予想図「実現された夢」1906年1月初公表

#### サグラダ・ファミリアにて En la Sagrada Família

サン・ホセ〔聖ヨセフの日、3月19日〕が近づいたので、またサグラダ・ファミリア〔聖家族〕聖堂に足を運ぶべきと思っていた。なぜなら、世間ではサン・ホセは「父」、すなわち「家族」の長であり、家長とは体の頭であり、体の部分が「聖

母マリア」と「神の子」であるからだ。愛が知識の価値を低め、すべてを大いなる優しさのなかに融和することがなければ、こうした考えを忘れさせたことであろう。なぜなら、われわれすべては何らかの形でサグラダ・ファミリアの一員であるからだ。

私は、ここに来るときは必ず感じるあの聖なる慄きを覚えながら、聖堂に足を運んだ。既に遠方から、その威厳さが、私にはなじみ深く、しかし常に新鮮な感じの大波のように、私に押し寄せてきた。なぜなら、その深さは底知れず、その豊かさは決して尽きることがないからだ。この聖堂は、どんなに馴染み深いものになっても、決してわれわれと同一になることはない。われわれの知らない何かが常にあり、神秘のなかに常に何かを宿している。この何かがその途方もない魅力なのだ。未だ生まれつつあるのに、聖堂は人を既に魅了する。

債務者のように私はそこに足を運んだ。他人に対する義務の履行ではなく、己のなかでの己に対する履行として。3月の白く輝く陽光を受けながら、未完の市〔拡大している都市〕の広い道路を歩いて行った。そよ風は小さなつむじ風のなかで埃をたて、空を忙しそうに雲がうごめいていた。そして、聖堂はいつものように、何度来ても同じように、大きな廃墟のように現れた。あるいは、ある少女が初めて見て言ったように、大きな鳩舎塔にも思える。事実、尖塔の高みや鐘塔の足場の間を鳩が飛ん

でいる。しかし私には、廃墟という感じがより強くするし、その方が私を喜ばせる。なぜなら、あの廃墟が誕生であることを知っているから、あらゆる廃墟の悲しさから私を解き放つからだし、破壊のように見えるこの建設を知ってからは、すべての破壊が永遠の建設の



図7 サグラダ・ファミリア聖堂、建設状況 1906年

ように私は思えるようになったからである。

飛ぼうと開いた翼<sup>16</sup>を既にひとつ持っている(図7)。しかし、もうひとつの翼は未だ開かず、その出現に震えているような空間のなかで、愛徳が形にするのを待つ。なぜなら、左右対称の神秘がそうなることを命じているからだ。したがって、心の目には、未だ作られていないその翼のヴィジョンのようなものが既があり、その翼の切望が自らの空間になるべき空間のなかで震えている。であるから、諸君は境内となるべきところに足を踏み入れ、目を閉じて行くなら、あの切望に包まれていると感じ、聖堂の内部にいると感じることだろう。その空間は既に聖域に違いない。こうした意味では、廃墟のなかの空洞にも似ており、それでもそれは常に聖域なのだ。

未だ見えないその聖域で何が起きているかを見るがよい。そして、聖堂のその奥に入ることにしよう。確かに祭壇も、聖像も、ミサもないし、信者も、そして司祭も未だいない。いまなお野原にすぎない。しかし、君らの目には、今までとは異なる何か特別の方法で太陽が照らしているように見えよう。聖堂のなかには、樹木があり、飛び交う鳥がおり、この時期のみずみずしく青づく草がある。そして、遊んでいる子供たちや休んでいる大人たち、忙しくしている女性たちや日に当る老人たちがいる。また、聖堂が最初に必要とする貧しい人々がいる。しかし、これらすべて、これらのすべては、何らかの愛徳を備えている。あえて言えば、すべてがプレ〔前〕聖域のなかにいるのだ。よく分からないのだが、樹木が枝を伸ばすこと、草がみずみずしく青づくこと、子供が遊ぶことや大人が休んでいること、さらに老人たち、すべては、それ以前と同じ存在だが、あたかも、殻を打ち破り、その精神を見せたいという存在意義で満たされているようだ。とするなら、聖堂は、すべて、石や火からパンやワインや言葉に至るまでのすべて、そうしたものの存在意義で満たされる場所に他ならないはずである。

---

16 一般にキリスト教聖堂は十字形の平面を持つ。上部の頭の部分が聖堂頭部であり、主祭壇の位置する内陣、足元の胴体部分が信者の礼拝場所となる身廊部、内陣に対しては外陣に相当する。十字の交差する中心部は交差部、そして腕の部分を交差廊、または翼廊と呼ぶ。身廊部と翼廊部それぞれの先端に正面(ファサード)が必要となり、それぞれに扉口が設けられる。サグラダ・ファミリア聖堂の「降誕」の扉口とは、一方の翼廊に設けられたファサードであり、その他2つのファサードは当時は未だ存在しない。したがって、1つの翼廊が存在する見方もできる。本文の「翼」とはこの「翼」廊を意味する。

われわれが毎日そこに行き、そこで一時を過ごすなら、ありとあらゆるものに認められる名のない何かを市まちやわれわれの生活にもたらすことになる。なぜなら、あそこの空気がこらの空気とは違うことは確かであるからだ。何も知らない子供まで、あそこでは普通とは異なる遊び方をし、老人の顔には無心の幸せな表情が見える。

私の訪問は、いつものように、聖堂の種子を探すかのように先ずクリプタ〔地下礼拝堂〕に降りることから始める。それは、十分に分別をわきまえ、再度、屋外の光のなかに拮がっている部分に昇るためである。後陣の裏側の高く積まれた石組の影のなかを一巡する。その影は確実に涼しい影なのだ。その後、すぐさま恐れ慄くことのないよう、扉口でのあの素晴らしい石の息遣いをちらりと覗き見る。次は、恐る恐る扉口の正面に回り、それを眺めに行く。その中央に立つと直ぐ、誠の扉口がすべてそうであるように、強烈な引力を感じる。それは優しい命令口調で、「入りなさい！」と言う。しかし、今回は、どういうわけか、一度もしていないことをした。入口に留まり、見上げたのだ。その瞬間、私の上すべてが建ち上がったかのように真上に扉口を見たのである。人の顔が私の方を見ながら現れ、ベツレヘムの星が石の光線を私の額に放った。私は一度として石でできた光を見たことがない。しかし、あれは光の流れだった。石が歌うのも一度として聞いたことがない。しかし、石の扉口全体が耳を聳るようなハーモニーで歌っているように思えた。入ったのか、それとも出たのか、よく分からない。なぜなら、この聖堂では外よりも内の方がより光があり、より風があるからだ。

その後、境内の外に出るまで、振り返ることなくそこを横断した。それから振り返り、ざわついた空を流れる雲の下、3月の白い陽光を浴び、大きく張った翼を再び見た。あの少女が言った鳩舎塔と扉口の両側に聳え立ちつつある2基の白い鐘塔をもう一度見た。

私はサグラダ・ファミリア聖堂をいつも同じ歌詞で歌っている、と人は言うであろう。実際、その歌が私のものであることを神はお望みであろう。なぜなら、それが真実として、しかもいつも同じ歌であるなら、それは常に新しく、民謡のように回を重ねるごとに価値を増すからだ。民謡は繰り返し聞くことにより浸透し、繰り返すほど豊かになる。それ故、古ければ古いほどより一層知られることになる。できることなら、そうなることを望む。すなわち、初めて聖堂について

私が語っていることを聞き、私の言葉を好きになれなかった人が、2回目は我慢してそれを聞き、3回目には興味を持ち始め、そして最後には、私自身を自ら説明できないとしても、私の語っていることが正しいと言ってくれることを望む。

なぜなら、問題は、私の説明が良いとか、悪いとかにあるのではなく、われわれの精神がこの聖堂の建設にかかっていることを、機会があればいつでも思い出すことにあるからだ。したがって、私の言葉のすべては、存在するもの

の賛美ではなく、良心の命ずる「もっとなすべき」という絶対的必要性に向けられている。それらの言葉を聞きたくない人が耳をふさいでも無駄である。なぜなら、その建設を一度でも見てしまえば、決して途絶えることのないその必要性が自身の内部に居残るからだ。もし忘れていたなら、ただそのことに気付いてもらいたい。そのためには、本稿の表題だけで私には十分であった。この短い表題に驚いた人が、急いでページをめくっても無駄である。精神的に急を要せば要すほど、物質的にはより不要になるようなこの種の義務に対しての痛みを感じるには、この程度の言葉で十分であるからだ。

その上、サン・ホセの祭日〔3月19日〕、どの道から行ったところで、結局のところ、この幸せな聖堂に辿り着かざるを得ない、と私は思う。

ジュアン・マラガイ

『日刊バルセロナ』（バルセロナ、1906年3月19日）<sup>17</sup>

Nº78, pp.3392-94

#### LO TEMPLE DE LA SAGRADA FAMILIA



図8 完成予想図 1906年3月 Joan Rubió

17 Maragall, Joan: "En la Sagrada Família", *Diario de Barcelona* (Barcelona, 19 marzo 1906), Nº78, pp.3392-94

## 5. 「時を超えて」(1907年)

これはサグラダ・ファミリアをテーマとする最後の第5聖堂讃歌であり、美術雑誌『フォルマ(形)』に掲載された。該当号はサグラダ・ファミリアとスルバランを特集し、後者については無記名の論稿「スルバラン」のみであったのに対し、前者に関してはピジュアの「サグラダ・ファミリアの作品」と本讃歌を収録し、聖堂写真計16枚(図9)を掲載する<sup>18</sup>。この聖堂讃歌は「御慈悲のお恵みを・・・！」

(1905)での計画案完成の要請に従い、二つの聖堂完成予想図(図6・8)が公表されたことにより、聖堂のヴィジョンが明らかにされたことを受けるものであろう。ある意味で、ガウディへの感謝を目的にしていたに違いない。切望していたものが手に入ったことによる安堵感が漂い、論調も極めて穏やかに思える。

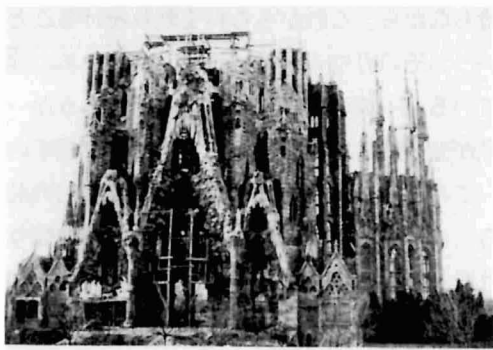


図9 降誕のファサード建設状況1907年

### 時を超えて Fuera del tiempo

サグラダ・ファミリアの工事現場に入るたび、時間を超越した感覚を覚える。すなわち、現在という瞬間が直ちに歴史的パースペクティヴを目の前に獲得する。遠ざかり、さらに遠ざかって行く・・・西暦二千数百年、既に完成し、献堂式を終え、内部は古く、香煙で黒ずみ、外部は陽光と風雨で褐色に焼けた聖堂の内部に私はいる。この瞬間から今度は、境内に入る自分を見るが、驚いたことにそこには半開きの翼がひとつしかない。それは、巨大な規模全体の他の大部分が眠っている大地の内奥から出現しているかのようだ。

サグラダ・ファミリアが着工された時、すなわち、あの英雄的な時代でのような瞬間から自分を見る。もっとも古い大聖堂の建立に立ち会った人々を羨むように、あの着工時に生きていた自分を羨む。我に返り、この英雄的な過去が私の現

18 Pijoan, J.: "La obra de la Sagrada Familia", *Forma* (Barcelona, 1907), Vol.II, N°16, pp.123-34 / Maragall, Joan: "Fuera del tiempo", pp.137-47

在であると知った時、私は大変誇らしげになり、心の世界に生きているように感じる。

アーチや円柱の、生まれつつある森から、既に心に描いている将来の完成した聖堂の魅力を説明するために現れた赤味を帯びた顎鬚の小さな男は、間違いなく、途方もない巨人であろう、と私は思う。

ガウディはどんな人であったのかと、今なお眠り、遠い未来の神秘のなかで待ちながら、これからも長く眠り続けることであろう人々は私に尋ねるに違いない。そのガウディは私の目の前にいる。途轍もない構想を力強く興奮して語っている。―彼は誰と話しているのだろうか―。ここに私がおり、この生きている私が彼と話している。ガウディが話す相手のひとりが、この哀れな私なのだ。

この度は、夕暮れ時の「降誕」の扉口の前、そこから遠くの夕焼けを眺めながら、彼はわれわれに話した。われわれの周りではすべてが分かり難いのだが、彼は彫刻という偉大な芸術の神秘をわれわれに説明した。この男は詩人なのだ。なぜなら、彼の唇ではすべてが真実であり、すべてを新しくするからだ。彼はそうしたことを話しながら、言ったことを自らに明らかにしているようだ。同時に、言っていることが彼自身にも新しく思われ、興奮しながら、驚喜してそれを楽しむ。これが詩人でなくて何であろう。

遠方の、さらにその先の彼方では、夕焼けも消え、周辺はすべて暗くなった。聖堂の上部では、透かし窓から入ってくる光線がすべてをどこからともなく明るくする、と彼はわれわれに説明する。正に森のなかでのように、森の内部でのように、と微笑みを浮かべながら、予見者の沈着した興奮をもって話し続ける。しかし、彼もわれわれもこの驚嘆すべきものを死すべき目で見ることのできないことを考えてみよう。そして、このことがわれわれにその喜びをさらに強くしよう。ヴィジョンとわれわれとの間には死という避けがたい存在がある。素晴らしい聖堂の輝く日を自らの目で見ることのできる人は、夕刻の森のなかでのような場所にいながら、数世紀前、同じ場所だが、いかなるヴォールトもない夜空の下でメランコリックに考えたこれら4人の男たちのヴィジョンを羨ましく思うかも知れない。

われわれはそこを立ち去る。夜風のなかでわれわれの声は時を超えた心の会話のように遠のいて行った。着工した聖堂の大きな翼は、それが属することにな



る巨大な規模については未だ知らず、われわれの後ろに長々と横たわっている。すべては月光を浴び、開放され、肉をそぎ取られ、途方もない……

ジュアン・マラガイ

『フォルマ（形）』（バルセロナ、1907）

Vol.II, N° 16, pp.137-47

## まとめ

マラガイは聖堂建設の財政難を解消すべく聖堂賛歌をマス・メディアに発表した。当時のバルセロナにおける詩人の発言力からして、かなりの成果が期待できるはずであり、そう考えて誰も疑わなかった。しかし、実際の年間献金総額を調査してみると、必ずしも期待通りに献金が増大していなかったことが判明する。「生まれつつある聖堂」は1900年12月19日に発表されているから、この効果は1901年に反映されることになろうが、前年度の約6万5千ペセタに対し、約5万7千ペセタと総額は減少する（図10）。1905年11月7日掲載の「御慈悲

	1900年	1901年	1902年	1903年	1904年	1905年	1906年	1907年
1月	9,263.03	7,239.42	6,585.93	8,820.66	5,867.35	4,438.60	11,961.85	11,366.44
2月	4,305.88	3,576.01	4,174.25	25,107.65	4,009.20	4,389.91	9,552.67	5,098.82
3月	7,323.99	7,221.53	6,763.27	6,361.76	10,784.66	5,245.76	8,157.55	8,672.25
4月	6,339.36	4,451.03	9,063.28	4,066.87	3,859.11	4,018.30	6,243.33	5,213.28
5月	7,653.39	11,266.13	3,244.53	4,580.91	3,243.99	2,806.49	4,752.11	3,593.35
6月	6,451.13	4,139.92	3,359.45	5,796.54	2,891.18	2,637.31	4,944.07	5,003.77
7月	4,060.57	3,136.99	3,419.75	3,510.19	2,101.78	3,266.66	9,167.58	4,643.60
8月	3,714.23	3,055.15	1,983.01	5,152.83	2,131.81	2,402.69	7,742.17	4,167.46
9月	4,015.90	2,522.00	3,375.36	1,813.64	1,771.30	2,367.04	3,016.39	6,757.72
10月	2,751.68	2,194.80	5,121.36	2,503.96	2,446.25	2,677.15	10,778.22	5,175.05
11月	4,817.42	2,916.97	2,671.60	2,881.01	2,529.42	11,297.45	6,252.52	4,529.14
12月	4,063.84	5,000.01	4,284.79	4,886.88	3,682.45	7,008.23	5,600.04	6,628.61
総額	64,760.42	56,719.96	54,046.58	75,482.90	45,318.50	52,555.59	88,168.50	70,849.49

図10 月間別献金総額表 1900-07（網目枠はマラガイ賛歌発表の月とその翌月、単位：ペセタ）

のお恵みを・・・！」に関しては、同年の年間総額約5万3千ペセタに対し翌1906年は約8万8千ペセタに増額しており、影響力のあったことが認められる。このことは月間献金総額の変化に如実に反映した。1905年の11月と12月の献金額が他の年よりもかなり増額しているのだ。しかし、マラガイの影響力は単発的で、永続的なものではなかった。聖堂が着工された1882年からスペインの内戦が勃発する1936年までの献金総額の変遷(図11-13)を見れば明らかなように、1900年から1907年の献金状況は低迷したままであり、決して好転したとは言えない<sup>19</sup>。結局のところ、マラガイの聖堂賛歌は聖堂財政に寄与しなかつ

年	年総額	年	年総額	年	年総額	年	年総額	年	年総額
1881	不明	1893	139,905.72	1905	52,555.59	1917	102,672.19	1929	106,564.04
1882	73,003.08	1894	130,787.44	1906	88,168.50	1918	85,717.56	1930	190,070.30
1883	70,353.18	1895	142,840.72	1907	70,849.49	1919	91,708.51	1931	91,307.64
1884	67,484.19	1896	221,232.59	1908	60,901.24	1920	94,312.50	1932	116,998.70
1885	85,957.51	1897	235,821.12	1909	55,218.30	1921	94,394.14	1933	70,598.21
1886	111,033.56	1898	85,807.38	1910	49,125.96	1922	110,031.24	1934	82,054.56
1887	109,091.94	1899	58,146.60	1911	67,677.11	1923	136,937.44	1935	148,945.24
1888	110,882.14	1900	64,760.42	1912	68,526.54	1924	91,867.63	1936	41,860.53
1889	101,777.43	1901	56,719.96	1913	52,105.27	1925	84,124.34		
1890	99,499.37	1902	54,046.58	1914	60,432.65	1926	134,124.22		
1891	107,357.50	1903	75,482.90	1915	88,836.35	1927	167,027.06		
1892	126,366.13	1904	45,318.28	1916	78,458.07	1928	106,978.39		

(単位:ペセタ)

図11 サグラダ・ファミリア聖堂、年間別献金表 1882-1936

たのである。

ガウディはシャイな性格で、人前に立つことを嫌った。公衆の面前で自己主張することはもちろんのこと、自作を宣伝することもできなかった。しかし、ガウディには強力な宣伝マンがいた。それがアウゼビ・グエイであった。彼は建築を

19 聖堂の建立母体「サン・ホセ信心会」の機関誌『サン・ホセ帰依の布教 El propagador de la devoción a San José』は1866年創刊の月刊誌であった。聖堂着工の翌年、すなわち1883年からは月2回の発行となり、各月1日と15日に発行され、スペインの内戦の勃発する1936年まで続いた。この期間の15日発行号に前月の献金表が掲載された。この数値を集計したものが今回掲載した献金表である。

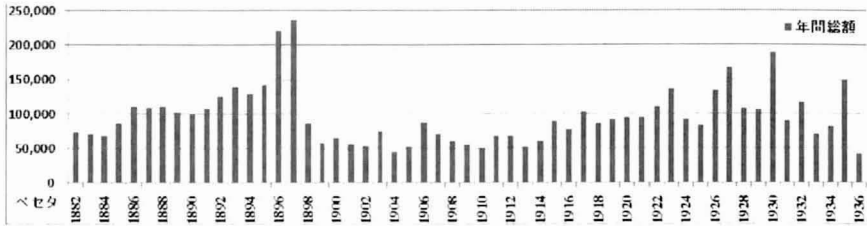


図12 サグラダ・ファミリア聖堂、年間別献金表グラフ (実額)

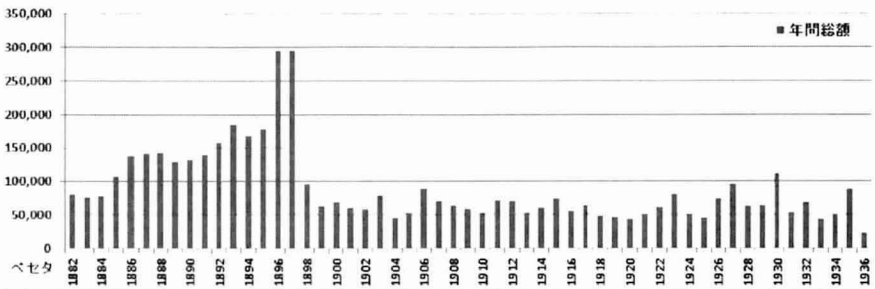


図13 同上、年間別献金表グラフ (1904-05, 07, 13年の物価指数を100とした場合)

依頼するだけのパトロンではなかった。グエイ館（1886－90）が完成すると新聞と雑誌にその紹介記事を書かせ、『カタルーニャ探訪センター』による集団見学を組織し、これを契機に同館の単行本（1894）を出版する<sup>20</sup>。グエイ公園（1900－14）でも建築家協会による集団訪問を組織させ、覚書（1903）を書かせる<sup>21</sup>。さらにはパリでのガウディ展（1910）でも援助しているのだ。明らかにガウディの名声の形成にはグエイの強力な支援があったのである。

マラガイはサグラダ・ファミリアの財政の好転には必ずしも成功したわけでは

20 新聞 *La Vanguardia* (Barcelona, 3 agosto 1890), Año 10, N°1540, pp.1-5, 及び雑誌 *La Ilustración Hispano-Americana* (Barcelona), Año 12, N°532 (11 enero 1891), pp.28-31 / N°533 (18 enero), pp.44-47 / N°535 (1 febrero), pp.76-78 / Puiggari, Joseph: *Monografía de la Casa Palau y Museu del Excm. Sr. D. Eusebi Güell y Bacigalupi ab motiu de la visita oficial feta per lo Centre Excursionista de Catalunya*, Barcelona; L' Avenç, 1894

21 Sellés y Baró, Salvador: *El Parque Güell. Memoria descriptiva*, Barcelona; Asociación de Arquitectos de Cataluña, 1903

なかった。しかし、彼の聖堂賛歌はそれ以上の影響をもたらした。「生まれつつある聖堂」がなかったとしたら、当時の聖堂があれ程の注目を浴びたであろうか。「御慈悲のお恵みを・・・！」がなかったとしたら、あの時点でサグラダ・ファミリアがカタルーニャのシンボルとか、バルセロナになくしてはならない聖堂とかと言われたであろうか。サグラダ・ファミリアを「カタルーニャの理想の記念碑」と規定し、ガウディを「神の使者」であり、「カタルーニャの天才」だと断定したのである。ガウディもまた、マラガイの激により聖堂計画案の作成から逃れることができなくなる。こうした理念的側面と、具体的な計画案という両側面において、現在の聖堂の建設が可能になっていることを考えると、マラガイの聖堂賛歌は今日のサグラダ・ファミリアには不可欠であったと結論づけることができるであろう。